

## Australian Aborigines and Nurse as an Occupation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 清史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026388">https://doi.org/10.14945/00026388</a>

# オーストラリア・アボリジニと職業としての看護師

——同化から<sup>カルチュラルセイフティ</sup>文化的安全の資格へ——

鈴木清史<sup>1</sup>

## 1 はじめに

1788年、英国人は後にオーストラリアと名付けられる南太平洋の広大な島大陸に流刑植民地を開設した。この島大陸にはそれに先立つ数万年以前から住民が暮らしてきたが、英国人を主とするヨーロッパ人入植者は自分たちと区別するために、大陸の先住民をアボリジニと呼んだ。

土地開発を推進する入植者にとって、アボリジニの扱いは大きな課題であった。入植当初は抹殺や大量虐殺という対応がとられた。入植地周辺を生活拠点としていたアボリジニ人口は激減した。しかし、19世紀半ばになると、アボリジニ保護という名目の下、かれらを隔離する施策が採用されるようになった。ヨーロッパ系住民が集中する地域から遠く離れた場所にアボリジニの集住地を定め居留地とした。また、アボリジニの子どもたちを親元から引き離して収容する専用の寄宿舍を設置したりした。それらの運営は、主に植民地政府、そして後には州政府が担い、施設ごとに専任の係官を配置した。寄宿舍の中には、キリスト教系の宣教会が運営していたものも少なくなかった。

居留地にしても、あるいは寄宿舍においても、アボリジニをヨーロッパ系入植者社会に同化させるための徹底した欧化教育が施された。ヨーロッパ系住民が主体の植民地社会、その後の連邦国家において必要だとされる、英語と家政、そして（植民地の存在意義を支える）英国史にかかわる基本的な知識と職業技能が提供された [鈴木 1995 など]。それにより、植民地開拓が早くから始まったオーストラリア大陸の東南部地域をもととの居住拠点としていたアボリジニたちは、固有の言語をはじめとする文化要素を奪われた。代わりヨーロッパ的生活様式の習得が強制されていった。

第2次世界大戦終了後の20世紀半ばになって隔離施設は廃された（児童収容の寄宿舍は1960年代半ば以降も、矯正施設という名目で存在した）。居留地で暮らしていたアボリジニは移動の自由を得て、ヨーロッパ系住民が多数を占める都市部に流れこむようになった。しかし、ヨーロッパ系住民との共住は望むべくもなく、アボリジニ系住民は教育を受ける機会も就職の場からも遠ざけられた。その理由の一つは、アボリジニには市民権が認められていなかったことがある [鈴木 1986, 1993, 1995]。

アボリジニにとって、偏見と差別、そして失業と貧困は日常的に直面する現実であった。かれらが社会の下層から抜け出すことは困難を極めた。そのような状況の中で、アボリジニ女性には、男性と比べてもヨーロッパ系住民中心の社会に入り込むきっかけがあった。それは、アボリジニ女性の多くが、居留地での欧化教育の中で家事手伝いに必要な知識や技術を習得させられていたため、ヨーロッパ系住民家庭の家政婦として雇われることがあったからである。また、それらの知識や技術が看護師や看護補助者のような資格習得にもつながることになった。そして、看護職は、アボリジニ——特に女性——のヨーロッパ系住民社会への流入と、経済的自立そして社会進出を促す踏み台（spring board）の役割も果たすと、当のアボリジニや同化を推進したい行政当局にも受け止められた。

本稿では、アボリジニと職業としての看護師に焦点を当てる。以下では、看護師という職業がアボリジニの人びとにどのように示され、当のアボリジニはそれをどのように受け止めていたのかを検討する。そしてこの職業とアボリジニのあり方をめぐり、かれらがオーストラリア社会でどのような立場に置かれてきたのかについて考察する。

<sup>1</sup> 静岡大学防災総合センター客員教授（日本赤十字九州国際看護大学・大学院）

なお、オーストラリアの先住民は、大別すると大陸のアボリジニと、オーストラリア大陸とパプア・ニュー・ギニア島との間のトレス海峡諸島の島民（Torres Strait Islander: TSI）に分けることができる。本稿が取り上げるのは大陸の先住民アボリジニである。文献資料の関係から両者に言及するときには、先住民あるいは先住系市民という用語を用いることもある。また、看護師と看護職は互換的に用いている。助産師の多くは看護師資格を持っているが、文献資料によっては看護師と助産師を区別していることもあるので、本稿でもそれに準じている。

## 2 看護師養成教育の概略

オーストラリアの看護師養成教育は、19世紀後半になってナイチンゲールの直弟子の1人であるルーシー・オズバーン（Lucy Osburn）と、部下の5人の看護師たちによって始まった [Nelson and Rafferty ed. 2010]。1868年、ロンドンから招聘されたオズバーンはシドニー病院に着任した。この病院はシドニーの中心地にあるマーティン・プレイスの東で今も業務を続けている。

オズバーンが、この時オーストラリアに持ち込んだ看護師養成教育のやり方は20世紀半ばまでの100年ほどの間継続された [Russell 2005:1]。オーストラリアの看護師養成教育ではこれまで改組改編が実施されてきたが、オズバーンの影響を受けた期間を含めて、大別すると3つの段階を認めることができよう。以下では、鈴木 [2015] から援用しながらオーストラリアの看護師養成教育を概観しておく。

第1の段階は、ロンドンからもたらされたナイチンゲールの教えを体現した看護師養成教育である。これは、ナイチンゲール・システムとも称された。この教育法は、ある種の職業訓練で、看護師を目指す生徒たちは、病院施設での労働を提供しながら、養成教育を受けた。そして「訓練下にある生徒には、食事、寮そして制服が無償で、そして少ないながらも賃金も提供されていた」 [Russell 2005:1]。

この時期の看護師養成課程では、いわゆる理論の学習よりも実際の病院現場での経験が重視された [ibid]。その背景には、看護師の任務が家事全般と十分な区別されていなかったことや、教育訓練機関としての看護学校の制度設計が未成熟だったことがある。生徒募集も必ずしも制度化されておらず、課程を始めるための資格も明確ではなかった。重視されていたのは、家事経験だった [Durbin 1991:9]。

看護学校への入学資格が曖昧な状況はかなり続いたようである。第2次世界大戦が始まる前にはオーストラリア全体で、看護師養成教育を受けるための前提となる準備教育——つまり、事前の学歴——についての議論が始まろうとしていた。しかし、戦中戦後の混乱の中で明確な結論が出されていなかった。そうした端境期に看護教育を受けようとした人びとにはさまざまな対応がなされたようである。1952年にシドニー病院で看護師養成の訓練を受け始めた女性はその1例である。彼女が看護師訓練を受け始めた直後、入校資格年齢（17歳）に20日足りていないことが判明した。しかし、看護学校は正規訓練年限の4年に、不足していた20日分を余分に延長するという条件を課して、彼女がそのまま在籍することを認めた [Murray=Rowlison 2002:5]。

この時期の看護師は、低い賃金のうえ住み込み勤務という待遇に置かれていた。また資格取得のための教育は、実際の現場での訓練だったことなどから、看護師を目指す人びとは決して多くなかった。養成訓練は、看護師志願者が一定の数に達すると随時開始されていた。そして、修了すると州ごとに設置されている看護師協会に登録され、登録看護師の資格を得ることができた。勤務は養成課程を提供している病院になるのが普通であった。このようにオーストラリアの看護師養成教育課程における最初の段階は、病院ごとに任されていた「徒弟制度（apprenticeship）」的な特徴があったのである。

看護師養成に統一的な基準の必要性が叫ばれるようになった第2次世界大戦を挟んだ時期である。これを第2期とすることができる。この時期の大きな転換は、看護師養成は病院ごとに任されていたが、第2次世界大戦中に有資格者の登録が州管轄で行われるようになったことである。これにより、病院ごとの看護師養成から、病院を横断する統一的基準の整備の必要性が認識されるようになった。そして病

院での現場訓練教育から公的教育機関での養成課程へと移行し始めたのである。

1959年オーストラリアの各州では、看護師養成教育を受ける資格が明確になり、中学卒業資格が看護師養成課程開始の必要な条件となった。さらに、1972年にはその要件が引き上げられ、看護師養成教育課程の入学には高等学校修了が求められるようになった。

これと並行するように、1970年代後半に入ると、オーストラリアの連邦政府の諮問機関は、看護師養成は高等教育機関（大学レベル）で行われるべきだという政策答申を公表し、1984年には看護師養成を高等学校以上の教育機関に移管することが正式に決定された。第3期の始まりである。オーストラリアで最大の人口を擁するニュー・サウス・ウェールズ州では、看護師養成教育は州内の14の職業専門大学（college of advanced education）と1つの大学（university）で提供されることになった。そして他の州および準州もこれに続くことになった。1993年になると看護職養成教育は大学課程に完全移行した。看護師の学士号（学部卒）が授与されると看護師資格が与えられ、オーストラリア看護教師協会に登録されることになる。

今日、オーストラリア国内には36の看護師・助産師学部がある（看護師助産師学部長会資料から）。これらの教育機関では、看護と助産の大学学部と大学院レベルの教育を受けることができるようになっている。

### 3 アボリジニとしての看護職

#### 主流社会への踏み台としての職業

看護職は、アボリジニにとって、ある意味身近な職業であり資格であった。19世紀半ばから第2次世界大戦が終了する頃まで、アボリジニはヨーロッパ系入植者の集住地からは離れた居留地や施設での暮らしを余儀なくされていた。居留地には専属の係官が駐在していた。係官は男性で、その配偶者が正規の看護職ということが多かった。また、キリスト教系の宣教会などが運営するアボリジニ児童収容施設では、修道女が管理監督の役を担うことが多かった。この中には、看護師資格を有した修道女もいた。こうしたことから、アボリジニにとって、看護師は権威のある、それも女性が得られる資格として捉えられていたと考えられる。

では、ヨーロッパ系住民からは隔離され、遠隔地での暮らしていたアボリジニがどのようにして看護師資格を得られたのか、またそれがいつ頃からだったのだろうか。それらを語る資料は極めて少ない。そうした中で、第2次世界大戦後、ニュー・サウス・ウェールズ州のアボリジニ福祉委員会（Aborigines Welfare Board for the Aboriginal people of New South Wales）が1952年に発刊した官製のアボリジニ同化促進月刊雑誌 *Dawn* と *New Dawn* はいくつかの情報を与えてくれる。以下では、これらの雑誌の記事を資料としてアボリジニと看護職について取り上げていく。

*Dawn* は1952年1月から1969年4月まで発行されていた。途中発行されなかった月もあるが、全部で202回発行されている。そして *New Dawn* は1970年4月から1975年までの間で51回発行されている。

なお、*Dawn* に関しては拙稿「aborigineからAborigineへ——官製雑誌 *Dawn* から見えてくること——」[『アジア研究』静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 2016:59-68] を参照してほしい。

*Dawn* が看護職を最初に取り上げたのは1952年9月号であった。この号の表紙にアボリジニ女性が掲載された。この女性は、イダ・ハドルストーンで、ノーザン・テリトリー（当時は、サウス・オーストラリア州の管轄にあった）出身であった。

雑誌に掲載された当時、ハドルストーンはシドニーで看護師訓練を受けていた。彼女についての紹介文には [ *Dawn*, 1952年9月号表紙裏頁 ]、「最近オーストラリア赤十字の救援看護奉仕隊員として認められた」とあるが、これ以上の詳しい説明はなされていない。

2つめの例は、1953年2月号の「誇らしいアボリジニの看護師」[21頁] という題名の記事に見ること

ができる。ここでは、ミュレル・スタンレイという女性の助産師が紹介されている。スタンレイは、1956年6月号の特集記事（「優れた業績をあげたアボリジニの素描」）にも取り上げられている。これら2つの記事をあわせると、スタンレイが看護師資格を得た経緯が見えてくる。

スタンレイはクィンズランド州の北部の町ケインズ（筆者注：クィンズランド州北部に位置し、今日では大珊瑚礁 [グレート・バリアリーフ] への玄関口として日本でも人気がある観光の要の都市）から20キロメートルほど離れたヤラバという田舎町に英国国教会宣教会が設置した施設で生まれ育った。

スタンレイは、1938年にヤラバから2000キロメートル以上南にあるニュー・サウス・ウェールズ州のニュー・キャッスルに出て、英国国教会のチャーチ・アーミー（church army）の訓練を受け始めた。この町で5年ほど活動した後、スタンレイはさらに南下してシドニー大学の婦人科病院で看護師養成訓練を受けた [Dawn 1953年2月号:19]。1944年の末に、彼女はニュー・サウス・ウェールズ州看護師登録委員会の最終試験に合格し、1945年にcertificateを取得した。その後、ヤラバの宣教会施設にもどり、1956年の時点で、スタンレイは地域にある聖ルカ病院の婦長を務めていた [Dawn 1956年6月号:15]。

アボリジニは1967年まで市民権を認められていなかった。そのような状況下の、それも第2次世界大戦のさなかに、当時でも遠隔地とされていた地域出身のアボリジニが、看護師やそれに準ずる資格を取得できたのはなぜだろうか。1つの理由として考えられるのは、彼女たちの生活の拠点としていた遠隔地では、ヨーロッパ系入植者の人口が少ないため、現地のアボリジニの人的資源に依存しなければ、さまざまな公的・社会的サービスが提供できないという状況があったことである。実際、居留地の担当官や寄宿舎の責任者は、自分たちの任務遂行のための補助者として現地のアボリジニを任用していた。そのために、現地のアボリジニ住民の中から選抜された人材がシドニーのような主要都市に派遣され、必要な資格の取得機会が与えられたのだろう。

スタンレイの場合、ニュー・キャッスル市でのチャーチ・アーミーの訓練も、そしてシドニーで看護師資格を取得するようになった時も、彼女の出身地であるヤラバで活動する英国国教会が資金援助をした。

居留地や寄宿舎の監督者たちは、自分たちの職務遂行に補助者を得られる一方で、選抜されたアボリジニは社会進出するための資格を獲得し、経済的自立ができるようになり、周囲からの尊敬を得ることができた。それが本人の達成感や自尊心を高めることにもつながっただろうと考えられる。

正規の登録看護師資格を得て、地域の大きな病院の婦長になったスタンレイは、自分自身を振り返りながらアボリジニについて次のような見解を述べている。

「わたしは地域の人びとの生活水準向上にかかわりたいと思ってきたし、その必要が分かる人ならきちんとそうすると感じている。アボリジニは劣等だと言われたり、報道されたりしている。しかし、そろそろわたしたちの中からももっと前進して、自分たちは何ができるのかを世の中に示す時が来ている。白人オーストラリア人はアボリジニに何をしてきたのかを知るべき時期に来ているとわたしは強く思っている」 [Stanley 1953年2月号:21] そして、…アボリジニが今必要としているのは教育だし、それが欠如していると、前進はできない… [ibid.; Dawn 1956年6月号:13]

1950年代は、居留地や寄宿舎に隔離されていたアボリジニが大挙して都市に移動し始めた時期であった。都市在住者となったアボリジニは、周囲のヨーロッパ系市民からの偏見や差別を経験し、都市部の片隅に追いやられていた [鈴木 1995]。その1950年代半ばに、スタンレイがこれほどの主張をしていることは、ある意味では驚きである。そうした言葉を発することができるのは、スタンレイが成功者として認められていたこと、そして自身もそれを認識していたからであろう。彼女のような存在は、アボリジニ全体に大きな影響を与えた。Dawnの記事は、「彼女（スタンレイのこと）を例にして、オーストラリアの他の地域でも看護師を目指し、資格を得た女性たちも出現している」と述べている [1956年6月

号:13]。

1950年代をとおして、職業としての看護師は、アボリジニの女子生徒たちにとっては、社会進出のための——そして社会進出とは当時はヨーロッパ系住民の中に溶け込み同化するという——踏み切り板の一つであったと思われる。*Dawn*にはそれを物語る記事が多数登場している。

### 記事における看護師の取り上げられ方

*Dawn*と*New Dawn*での看護職に関する記事を調べていくと、特徴があることがわかる。1つは、多くの女子生徒たちが看護師を将来の目指す職業としていることを紹介する記事である [1953年5月号; 1955年2月号; 1957年12月号; 1958年1月号; 1959年9月号; 1960年7月号, 11月号; 1961年6月号; 1963年1月号; 1964年3月号, 9月号; 1965年2月号; 1967年2月号]。これらの記事は、読者からの投稿、読者による作文コンテストでの入賞作品の紹介、さらには編集者が実際に見聞したことを編集後記に記す、というかたちで取り上げられている例である。

2つめは、すでに紹介したハドルストンやスタンレイのように看護師資格を得て社会で活躍している人物、看護師あるいは看護補助者の資格を得たばかりの例、そして資格を得るために奮闘している人びとを、いわばロール・モデルのように取り上げた記事である。分量が多いが、以下の括弧内に発行年月を示しておく [1952年9月号; 1953年2月号; 1954年4月号, 12月号; 1955年6月号, 7月号; 1956年2月号, 5月号, 6月号, 12月号; 1957年1月号, 5月号, 8月号, 11月号; 1958年8月号; 1960年3月号, 4月号; 1961年1月号; 1962年1月号, 3月号, 8月号, 11月号; 1964年1月号, 6月号, 11月号; 1968年10月号; 1970年11月号; 1971年5月号, 11月号, 12月号; 1972年2月号, 7-8月合併号, 9月号, 11月号, 12月号; 1973年3月号, 4月号, 5月号, 6月号, 7月号, 10月号; 1974年3月号, 4月号]。

これらの中には看護助手が表紙写真に登場する例や [1952年9月号; 1961年1月号]、同一人物が繰り返して取り上げられていることもあるが、記事からはある特徴を読み取ることができる。それは、どの記事も看護師として成果を上げた人物には賞賛と敬意が示され、看護師資格を得ようとしている人びとにはその努力が続くような応援を送っていることである。記事で取り上げられた人びとのなかには、看護職の魅力を示すことで、次世代へのエールを送ったりしている。

1955年12月号に登場したロレーヌ・ダラシがその例にあたる。彼女はシドニーから400キロメートル弱西部に位置する田舎町で勤務している登録看護師である。ダラシは、自分の職業について、「看護師ほどいい仕事はないわよ。仕事の時でも休みの時でも素晴らしく楽しいから」という [*Dawn* 1955年12月号13]。

こうした、いわば看護師による職業への満足や礼賛を示す記事は、雑誌が発行されていた期間をとおして58回を数える。これらに加えて、看護職にかかわる別の種類の記事もある。アボリジニ児童の寄宿舎では、看護にかかわる科目が提供されていることを伝える地域情報の欄の記事がそれにあたる。また、看護師を目指すアボリジニ児童に、病院での看護訓練課程への入学に差別はないという通知記事もある [1952年5月号:4]。

1969年に発行休止となった*Dawn*が1970年に入って*New Dawn*と衣替えすると、職業と収入を取り上げる記事が掲載されるようになる。それらは極めて直裁的で、教育を受けることでよりよい収入が期待できことや、その職業が看護職であるとのほめかしたりしている。そして1974年3月号では、アボリジニの看護師募集の一面広告が登場する。こうしたことから、看護師を取り上げる記事の数はさらに増えることになる。

1952年1月から1975年7月までの間に発行された*Dawn*と*New Dawn*をとおして、看護師関連記事は概ね4ヶ月に1度位の割合で登場している。1つの職業がこれほど繰り返して取り上げられているということ、それ自体が目玉に値するといえよう。

*Dawn*と*New Dawn*は、ニュー・サウス・ウェールズ州政府によるアボリジニのオーストラリア社会

への同化を推進するための官製の宣伝雑誌だった [鈴木 2016]。看護職が頻繁に取り上げられるのは、この職業がアボリジニの経済的自立とオーストラリア社会への進出を促進する道具だと考えられていたからである。

宣伝の効果はあったようで、1950年代と60年代をとおして、看護師を将来の職業にしたいという女子生徒の意思表示が多かったことにも反映しているのは明らかである。もちろん、そうした投稿が雑誌編集の段階で故意に選ばれ、掲載されているという推測も可能であるが、それ自体が雑誌発行を担う行政側の看護職への期待を示しているといえよう。一方で、州政府のこのような姿勢とは裏腹に、アボリジニが看護師養成の訓練課程に入学するにはいくつかの困難があったことも事実のようだ [Durdin 1991]。

1950年代、オーストラリアは第2次世界大戦で疲弊したヨーロッパからの移住者を積極的に受け入れていた。オーストラリア政府は、移民受け入れに際しては、移住者が母国で取得していた看護師を含むさまざまな資格を受容した。加えて、看護職を目指す移住者には入国後に必要な訓練を受けられる機会を提供していた。これはこの時期、オーストラリア国内での看護師需要が高かったことと関連している。しかし、こうした国内事情も、看護師を目指していたアボリジニには後押しにならなかった例もある。それは多くのアボリジニ人口を抱えていたサウス・オーストラリア州でのことであった。看護師養成課程を付属する大きな病院で、養成課程の責任者であった人物は、アボリジニの入学を認可しなかったことがある、とダービンという [Durdin 1991:159と1966]。

こうした例からうかがえるのは、看護師をとおしてアボリジニの同化を推進したい行政府の政策意図に反して、看護師養成課程の現場では、アボリジニへの偏見や差別が依然として続いていたことである。アボリジニへの偏見や差別的な待遇が21世紀の今でも話題になることを考えると、アボリジニが市民権さえ与えられていなかった1950年代や60年代では就職のための教育機会が閉ざされていたとしても不思議ではない。

### アボリジニ看護師への新たな期待

*Dawn* と *New Dawn* におけるアボリジニをめぐる看護職の取り上げ方についてもう1つ触れておくことがある。これらの雑誌が発行されている期間を通じて、職業としての看護師はアボリジニがオーストラリアの主流社会に入り込むための踏み台のように取り上げられていたことは既に述べている。州政府の、公的なこの姿勢は概ね一貫している。一方で、看護職者のアボリジニに対しては、1970年代に入ってから、つまり、*New Dawn* が発行され始めてから、看護師として働くアボリジニの人びとには新たな役割期待が示されるようになっていく。

これは1960年代後半からのオーストラリアでは先住民に対する待遇が転換しつつあったことと関連しているのかもしれない [鈴木 1993, 1995, 2016など]。*New Dawn* が発行され始める3年前の1967年、オーストラリアでは国民投票が実施された。その結果、憲法改正が行われオーストラリア先住民が国勢調査の正式対象となった。アボリジニに市民権が認められたのである。この大転換に呼応するかのようになり、オーストラリア国内ではアボリジニが直面する社会的状況が初めて公に議論され始め、関連する報告書が相次いだ [例えば、Rowley 1970; Stevens 1972; Henderson 1975など]。

アボリジニにかかわる社会的な問題はさまざまであったが、注目を集めたのは、彼らに対する偏見や差別的な待遇とアボリジニが直面している深刻な貧困と教育、就職、健康保健そして住宅などにおける不利な状況だった。これらの問題は複雑に絡み合っていたため、一朝一夕の解決策は見当たらなかった。

その中で、*New Dawn* では、アボリジニ自身が対応しやすい保健医療の記事を掲載するようになる。この時期は、アボリジニの集住地として知られるシドニーのレッドファーンにアボリジニ医療センター (Aboriginal Medical Centre) が開設され、それをきっかけに州内はもとよりオーストラリア全土で類似施設の設置が続いた。それらを伝える記事が強調するのは、アボリジニの保健医療施設にはアボリジニ看護師が駐在していることから、同胞への対応がきちんとできる、ということであった [1971年11月号;

1972年12月号; 1973年3月号, 5月号; 1974年3月号]。そして、*New Dawn*の最終号となる1975年7月号では、保健医療において、アボリジニの人びとに関する課題についてのセミナーが開かれたという記事が掲載されている。

記事は「アボリジニの保健医療に関する行政担当者のためのセミナー」と題されている。これによれば、セミナーでは「アボリジニの人びとに特有の保健医療の問題に関して、医療保健専門家を交え、アボリジニの保健医療関係者と議論がなされた。アボリジニの保健医療従事者は、自分たちだけでなく地域看護の専門家も自らの役割をどうとらえるのか、また過去に経験した困難などについての情報交換の必要があることを示した」[ibid. 10]。

*Dawn*と*New Dawn*に登場した一連の記事を俯瞰してみると、アボリジニにとっての職業としての看護師の意味づけに変化が生じていることを見てとることができる。それは、アボリジニをヨーロッパ系住民社会に同化させるという政策目標がより顕在化した第2次世界大戦以降しばらくの間、看護職はアボリジニがオーストラリアの主流社会に同化する（そして、させる）ための踏み台と見なされ、そう宣伝もされた。看護職に就いたアボリジニは経済的自立を得て、ヨーロッパ人が主体のオーストラリア社会での暮らしを確立できるようになった。しかし、アボリジニに市民権が認められ、同化政策が放棄されると、ヨーロッパ系住民の中に入り込もうとしたアボリジニの看護師たちは同胞の生活改善を促す役割を果たすことが期待されるようになった。アボリジニにとって、看護師はヨーロッパ系住民を主体とする主流社会に進出するための資格であると同時に、アボリジニの保健医療にかかわる理由にもなったのである。この図式は今も続くのであるが、このことは後述する。

#### 4 看護職従事者の現況

2010年オーストラリア政府は医療従事者規制法（Health Practitioner Regulation National Law: 通称the National Law）を施行した。この法律によって、オーストラリア保健医療従事者規制庁（Australia Health Practitioner Regulation Agency: AHPRA）が設置され、州ごとに活動していた医療関係協会が全国的に統合した。そして、この管轄下に、看護師・助産師の登録や監督を担当するオーストラリア看護・助産師委員会（Nursing and Midwifery Board of Australia: NMBA）もある。

NMBAは3カ月ごとに看護師・助産師登録統計を発表している。2018年9月の報告によると [NMBA *Registrant Data Reporting period: 1 July 2018 - 30 September 2018*]、NMBAに登録している看護師・助産師（あるいはその両方）の有資格者はオーストラリア全土で39万6522人を数えている。この中には、実際には勤務していない5704人と職場復帰のための仮登録者が234名含まれている。しかし、NMBAによる、この統計ではアボリジニ（とトレス諸島民）の看護師と助産師の数値は示されていない。

そこで、少し古い数値であるが、2つの先住系住民の看護師・助産師の数値が示されているオーストラリア国立保健医療福祉研究所（Australian Institute of Health and Welfare: AIHW）が発表している「看護・助産労働統計2015（*Nursing and Midwifery Workforce 2015*）」（cat. no. WEB141）を参考にする。この統計は総数だけを示しており、アボリジニとトレス海峡諸島民の看護師・助産師の性別統計、年齢構成などの詳細を読み取ることはできない。そうした資料が提示されていないことについてなんの説明もなされていないことをあらかじめ断っておく。

AIHWの資料からは、2015年当時オーストラリア全体で実際に勤務している看護師・助産師は36万8人である。そのうち自分が先住民系であると申告した看護師・助産師は3187名で、これは看護師助産師全体数の1.1パーセントに当たる。

アボリジニとトレス海峡諸島民がオーストラリア全人口に占める割合（先住民人口は64万人強で、国全体では全人口の3パーセントを少し上回っている）と比較すると、看護職に就いている先住系の人びとの割合（1.1パーセント）は低いといえるかもしれない。しかし、この割合について、AIHWは何ら判

断を示していない。

州ごとの看護師と助産師の総数に占める先住民系看護師・助産師の割合は、ノーザン・テリトリー準州の2.4パーセント、タスマニアの2.2パーセント、ニュー・サウス・ウェールズ州とクィンズランド州はそれぞれ1.4パーセントである。もともと先住民系人口が少ないヴィクトリア州では、その割合は0.5パーセントであった。

保健医療分野のアボリジニの従事者数や割合については、ニュー・サウス・ウェールズ州が2013年に公表した将来計画 (*Aboriginal Health Plan 2013-2023*) では、2023年までに、保健医療分野の全労働力の2.6パーセントに引き上げるという目標が示されている [NSW 2012:13]。この数値には、看護師・助産師以外の保健医療関係者も含まれている。

## 5 保健医療現場での新しい動向

2018年3月オーストラリアの看護師・助産師界で新しい行動倫理綱領 (Code of conduct for nurses and Code of conduct for midwives) が施行された。これらは、それ以前の看護師と助産師の専門職者行動倫理綱領 (Code of professional conduct for nurses と Code of professional conduct for midwives 2008) を改訂したものである。

改訂は2013年から2023年の10年計画で連邦政府によって施行されている「アボリジニ・トレス海峡諸島民健康計画 (National Aboriginal and Torres Strait Islander Health Plan 2013-2023)」(公式通称：格差解消 [Closing the Gap]) に連動して、実施された [Australian Government 2013]。この計画が目指す将来像 (Vision) では、以下の宣言がなされている。

「オーストラリアの医療保険体制には人種差別主義と不平等は存在せず、すべてのアボリジニとトレス海峡諸島民は、効果があり、質が高く、かつ適切で良心的な費用設定がなされている医療保険サービスを利用することができる。健康に影響する社会的不平等や影響要因に対処する施策ともに、本計画は2031年までを達成期限として健康の平等を実現するために求められる政策を提供する」[ibid. 1]。

この計画では、4つの原則 (principles) と12の優先項目が提示されている。原則の中で最初にあげられているのは、平等な保健医療と人権に基づく対応で、これは12の優先項目のうちの「人種差別主義と不平等からの決別」に対応する。これを、看護師と助産師のそれぞれの行動倫理綱領で具体化したのが「文化的安全 (Cultural safety)」である。

この文化的安全という考え方は、2018年に入って、オーストラリアのマスメディアに大きく捉えられた。中には、「(引用者補足：ヨーロッパ系) 看護師と助産師は (同：先住系の) 患者に接するとき (同：自分に付随する) 『白人の優越性』を謝罪しなければならない」などという扇動的な報道をしたマスメディアもあった [news.com 2018; Parnell 2018; Mail On Line (*Daily Mail*) 2018など]。

実際には、新しい綱領で示された「文化的安全 (cultural safety)」は、ヨーロッパ系あるいは非先住民系の保健医療従事者が、先住系住民の患者に「自分は先住民ではない」という断りを入れることを求めている。

文化的安全という考え方が登場した背景には、「オーストラリア先住民が健康面で不利な状況に置かれているのは、過去の植民地経験と差別的政策、さらには今日も続く差別にさらされてきた」という反省がある [NMBA 2018]。そして、文化的安全は、決して新しい考えではない。NWBAの文書は、「看護師と助産師は、すべての人びとを個人として文化的安全に配慮し、敬意を払い業務に従事し、熱意ある専門家として関係を築き、個人のプライバシーと情報を保護する」ことが、文化的安全であるという (ibid.)。

オーストラリア先住民の看護師・助産師の団体であるアボリジニ・トレス海峡諸島民看護師助産師会

議（Congress of Aboriginal and Torres Strait Islander Nurse and Midwives: CATSINaM）は、文化的安全を次のように説明する [2014]。

「文化的安全は先住民の定義づけ（a First Nations' context）の中で生じた考え方で、看護師と助産師に適した用語である。この考え方はCATSINaMによって意義づけられている。CATSINaMは、文化的安全が臨床での安全と同じように、質の高い看護に重要であることを主張する…文化的安全配慮は、看護の提供者ではなく、看護を受ける人が決めるのである…文化的安全は保健医療従事者が何をするのかではなく、どうするのかという、実践にかかわる考え方であり、社会の多様性というのではなく、社会でどのように扱われているのかということである。したがって、それは、体系的、構造的な課題と健康にかかわる社会的決定要因に焦点を合わせることになる。人びとの差異にかかわらず看護を提供するということから、人びとの固有なニーズを考慮した看護を実践するという基本的な考え方を示している…」

CATSINaMによる文化的安全の必要性は、看護師・助産師だけを対象にしたのではなく、保健医療従事者すべてを対象にしている。そして、先住民の文化についての知識習得が必要だとする報告や研究は、CATSINaMだけでなく、さまざまな研究や報告の中でも示されている [例えば、Downing, Kowal and Paradies 2011(23) 3:247-257; Freeman, Edwards, Bauman, Lawless, Jolley, Javanparast and Francis 2014(38) 4:355-361; Nielsen, Stuart, Gorman, 2014(48) 2:190-196など]。また、アボリジニとトレス海峡諸島民の患者と非先住民系の保健医療従事者の間にある文化的差異が保健医療サービスの提供者と受け手との間の不公平を生じさせる可能性を取り上げた報告もなされている [Li 2017(4):207-210]。

新しい行動規範の採用により、看護師と助産師それぞれに課せられた行動倫理の1つとして文化的安全が実際の臨床の現場で実践されて行くであろうことは容易に想像できる。一方、行政当局もそしてNMBAも明言はしていないが、それは先住系医療従事者の雇用の拡大である。この考え方は、単に実践や行動を求めるだけでなく、それ以上の波及的影響があることも考えられる。

「格差解消（Closing the Gap）」を謳うアボリジニ・トレス海峡諸島民健康計画に掲げられている4つの原則には、「アボリジニとトレス海峡諸島民の人びとによる管理と従事」というものもある。この原則からは、先住系住民を対象にする保健医療従事者は、先住民の歴史的経験を理解し、文化や価値観を共有できる人材がより望ましい、という姿勢を読み取ることは困難ではない。実際、先住系住民の健康課題に対処するための人材養成は、2013年以降の大きな政策目標にもなっている [Commonwealth of Australia 2013]。これはアボリジニ（先住民）にかかわることは、自分たち（つまり同胞）が管轄するということである。アボリジニがアボリジニの事象にかかわるという動向はアボリジナイゼーション (aboriginization) の考え方の現れである [鈴木 2005:112]。アボリジナイゼーションは、ひいてはアボリジニやトレス海峡諸島民の看護師と助産師への人材需要につながることになる。

## 6 揺れ動かされるアボリジニの立場 ——まとめにかえて——

18世紀後半から始まった英国人を中心としたヨーロッパ系住民との接触の歴史において、アボリジニは欧化すること、言い換えると主流社会への同化が求められてきた。職業としての看護師は、アボリジニの隔離政策が廃される1940年前後から1960年代半ばまで、アボリジニ——それも女性——を対象にした同化促進の道具あるいは資格として行政当局が積極的に利用した。その時流にのった人も少なくはなかった。そして、半世紀を経たいま、この職業は別の役割を果たすことが期待されるようになっている。

アボリジニ（とトレス海峡諸島民）の全般的な健康状況は、非先住系オーストラリア人よりも劣っているとされている。これを改善するためにアボリジニの看護師はアボリジニとして保健医療サービスに積極的ににかかわることが期待されている。その理由は、アボリジニが固有の文化を有する人びとであ

り、かれらの健康状況を改善あるいは向上させて行くには、アボリジニ（とトレス海峡諸島民）の文化に敬意と払い、それが配慮された臨床の現場が望ましいと考えられているからである。そして、この文化的安全（cultural safety）への配慮は保健医療従事者すべてに求められているが、もっとも効果的に行えるのは、文化的背景を同じくするアボリジニ（とトレス海峡諸島民の先住系市民）の保健医療専門職者だというのが暗黙に示されている。

これらのことから、過去半世紀あまりの間で、アボリジニと職業としての看護師のあり方への期待——行政側とアボリジニ自身の——が変化していることを読み取ることができる。それは、アボリジニの同化促進に有用さとされていた看護師という職業が、アボリジニ（とトレス海峡諸島民）の健康状況改善を促すための文化的安全（cultural safety）を担保し得るようになってきているという変化である。

このような変化が主流社会とアボリジニ自身の両者のせめぎ合いで生じているのは間違いない。同時に、このせめぎ合いは、これまでのオーストラリアの歴史において、アボリジニがいつも立たされていた曖昧な位置を反映していると思われる [鈴木 2005]。

アボリジニは、過去200年以上も間、ヨーロッパ系住民主体の主流社会からは、否定と重用という2つの極の間で揺り動かされてきた。否定は同化強制であり、重用はオーストラリアを表象する文化的固有性の体現者という評価である。アボリジニとしての職業としての看護師の意味合いの変化にも、この2つの極の図式が映し出されていると考えられないだろうか。

# Australian Aborigines and Nurse as an Occupation

Seiji Suzuki <sup>\*)</sup>

Right after British settlers landed in the south east corner of Australia in 1788, it became one of their serious and complicated concerns how to deal with original inhabitants of the land, later called and eventually named as Aborigines. At the early stage of the colonization, massacre or genocide was an instant solution to them. But as time went by, they started to accommodate indigenous people in institutions set up in various parts of the colony in the middle of the 19th century.

Aborigines interned in the facilities were forcefully exposed o Europeanisation programs in view with them getting absorbed into European oriented main stream of Australian population and consequently assimilated. This isolation policy was maintained nearly for a century. When Aboriginal people gained partial freedom to move away from the institutions, assimilation of the aboriginal population into the main stream of Australia became an immediate issue for the authority. They tried to pursue this by absorbing Aboriginal population as a labor force. For the authority at that time, an occupation of nurse seemed to be feasible for facilitating the assimilation of female indigenous people into the main stream.

The first part of this paper is to examine how an occupation of nurse was presented to Aboriginal people. In order to pursue this, this article focuses on the magazines *Dawn* and *New Dawn* as data sources. These magazines were prepared by the State of New South Wales from 1952 to 1975 albeit with several interruptions in-between. Throughout the magazines, nurse related articles appeared almost every four months. It could be noteworthy that one specific occupation was especially referred to in various manners in the government authorized publication so frequently. And from these articles, it became apparent that an occupation of nurse was regarded as an assimilation facilitating job. In the second part of this paper, then, it is considered that, by paying attentions on Aboriginal and Torres Strait Islanders Health Plan 2013-2023 and also the 2018 changes of Code of conduct for nurses and that for midwives as well, this occupation has now gained a potential of performing another role for cultural safety in clinical settings.

<sup>\*)</sup> Graduate School of Nursing, Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing and Visiting Research Professor, Shizuoka University

## 参考文献／資料

Australian Government

2013 *National Aboriginal and Torres Strait Islander Health Plan 2013-2023*

Australian Health Practitioner Regulation Agency (AHPRA)

2015 <http://ahpra.gov.au>

Australian Institute of Health and Welfare

2015 *Nursing and Midwifery Workforce 2015* cat.no.WEB141

The Australian Nursing and Midwifery Accreditation Council (ANMAC)

2015 <http://anmac.gov.au>

Congress of Aboriginal and Torres Strait Islander Nurse and Midwives (CATSINaM)

2014 <https://www.catsinam.org.au/policy/cultural-safety>

Council of Deans of Nursing and Midwifery

2013 <http://www.cdnm.edu.au/schools-of-nursing-and-midwifery>

Australian Institute of Aboriginal and Torres Strait Islander Studies

*Dawn* と *New Dawn* は <http://aiatsis.gov.au/collections/collections-online/digitized-collections/dawn-and-new-dawn> から入手できる。

Department of Health

2013 <http://www.health.gov.au/internet/publications/publishing.nsf/Content/work-review-australian-government-health-workforce-programs-toc-appendices-appendix-iv-history-commonwealth-involvement-nursing-midwifery-workfor:updated> 24 May, 2013

Downing, R. , Kowal, E. and Paradies, A.

2011 ‘Indigenous cultural training for health workers in Australia’, *International Journal for Quality in Health Care*, 2011, Volume 23, November 3: pp.247-257.

Durbin, J.

1991 *They became Nurses: A History of Nursing in South Australia 1836-1980*, Allen and Unwin Australia Pty. Ltd, North Sydney, NSW.

Freeman, T., Edwards, T., Bauman, F., Lawless, A., Jolley, G., Javanparast, S. and Francis, T.

2014 ‘Cultural respect strategies in Australian Aboriginal primary health care services: beyond education and training of practitioners’, *Australia and New Zealand Journal of Public Health*, 2014 vol.38. no.4: pp.355-361.

Henderson, R.

1975 *Poverty in Australia; First main Report, Commission of Inquiry into Poverty*, AGPS

Li, J.L.

2017 Cultural barriers lead to inequitable healthcare access for aboriginal Australian and Torres Strait Islanders, *Chinese Nursing research* 2017(4):207-210.

Mail On Line (*Daily Mail*)

2018 <https://www.dailymail.co.uk/news/article-5526907/Nurses-forced-announce-white-privilege-treating-Indigenous.htm> (21 March, 2018)

Murray-Rowlison, E.

2002 *Lucy's Angels*, published by Griffiths, V. J., Coffs Harbour, NSW.

Nelson, S. and Raffery, A. M. (ed.)

2010 *Notes on Nightingale: The Influence and Legacy of a Nursing Icon*, ILR Press, Cornell University

Press, Ithaca and London.

Nielsen AM, Stuart, LA., Gorman, D.

- 2014 'Confronting the cultural challenge of the whiteness of nursing: Aboriginal registered nurses' perspectives', *Contemporary Nurse: A Journal for the Australian Nursing Profession*, 2014 volume48, issue2:190-196.

News.com

- 2018 [https://www. https://www.news.com.au/lifestyle/health/australian-nursing-and-midwifery-code-of-conduct-slammed-over-white-privilege/news story/4d1d71f45af35b8ffdd25fd40804d5a3](https://www.news.com.au/lifestyle/health/australian-nursing-and-midwifery-code-of-conduct-slammed-over-white-privilege/news-story/4d1d71f45af35b8ffdd25fd40804d5a3) 2018年12月10日アクセス

New South Wales Government

- 2013 *Aboriginal Health Plan 2013-2023*

Nursing and Midwifery Board of Australia (NMBA)

- 2018 Joint statement (March 23, 2018)

Parnell, S.

- 2018 "White privilege" storm over nursing code', *The Australian*, 1 February, 2018  
[https://www.theaustralian.com.au/national-affairs/white-privilege-storm-over-nursing-code/news story/2b9c942b8ed174de865496 396b7e7e82](https://www.theaustralian.com.au/national-affairs/white-privilege-storm-over-nursing-code/news-story/2b9c942b8ed174de865496396b7e7e82)

Russell, R. Lynette

- 2005 *From hospital to university--the transfer of nurse education*, [www.cdnm.edu. au/ wp/ History NursingEducation.pdf](http://www.cdnm.edu.au/wp/HistoryNursingEducation.pdf).

Rowley, C. D.

- 1970 *The Destruction of Aboriginal Society*, Penguin Books

Stevens, F. S. (ed.)

- 1972 *Racism, The Australian experience; A Study of Race Prejudice in Australia*, Vol.1,2,3, Taplinger Publishing

鈴木清史

- 1993 『増補 アボリジニー オーストラリア先住民の昨日と今日』明石書店。  
1995 『都市のアボリジニ 抑圧と伝統のあいだで』明石書店。  
2005 「差異化の意味するところ——多文化主義と先住民——」『オセアニア』講座 世界の先住民 族ファースト・ピープルズの現在 09 綾部恒雄監修（前川・棚橋編）明石書店:98-114。  
2016 「aborigineからAborigineへ ——官製雑誌Dawnから見えてくること——」*Asian Studies* (『アジア研究』) 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター No.11:59-68、2016年3月